

平成29年度第2回京都府認知症疾患医療センター連携協議会 摘 録

- 日 時 平成29年9月11日（月）16：30～18：15
- 会 場 京都府医師会館 310会議室
- 出席者 別紙のとおり
- 内 容

1 開会

定刻により、事務局が開会を宣言。委員長代理として高齢社会対策監が挨拶。

2 報告事項

府内認知症施策の状況について事務局から説明

3 意見交換

（1）若年性認知症支援について

<意見>

- ・職場の環境の調整、事前指示書作成の支援などを行なっている。
- ・大学病院の特徴かもしれないが、地域資源の利用には心理的に抵抗がある患者がおられるため、病院としてできることとしてカウンセリングを行っている。
- ・若年性認知症支援プログラムは、本人が使えるサービスがないという相談を受けて、テニス教室を2012年の10月に始めたのが始まり。テニス教室と並行して、絵画サークルを行っている。家族も参加されるので、本人支援と同時に家族支援にもなり、その集まりがピアサポートの場になっていく。
- ・テニス教室から認知症カフェへと広がっていくと、街の中にももう少し場所を作っていけないかという取組が、「認知症アクションアライアンスれもねいど」というプログラム。ここで茶園農家と連携して茶摘み等の取組が始まった。
- ・若年性認知症の方の場合、障害福祉サービスを利用するケースもあるため、利用に向けたサポートを地域包括支援センター等と連携しながら行う。また、山城北圏域では認知症カフェに若年性認知症の方が集まっているため紹介することもある。
- ・認知症カフェに紹介することもあるが、参加者に高齢者が多いので、馴染みにくい。若年性認知症の方に合った資源は不足していると感じる。
- ・若年性認知症の方は少なく、地域包括支援センターなどからどのように対応すればいいかと相談を受けることがあり、関係機関に集まってもらい会議を行い、病気の対応について説明することがある。

(2) 認知症初期集中支援チームとの連携について

<意見>

- ・かかりつけ医との関係が大変重要。宇治久世医師会で認知症診療マニュアルを作成し、初期集中支援事業の紹介と、かかりつけ医が初期集中支援チームにアクセスをする際の連絡票をマニュアルの中に入れていただいた。かかりつけ医は、それをコピーしてファクスすれば支援に繋がる。さらに、初期集中支援でディスカッションした内容をコミュニケーションレポートとしてかかりつけ医にお返しする。相互に交流する仕組みが医師会のご協力のおかげでできており、機能している。
- ・かかりつけ医でも、在宅医療を積極的に行っておられる方は地域包括支援センターとの関係が非常に強く、何かあれば相談する関係性ができているが、地域包括支援センターと距離が遠い先生もおられる。地域包括支援センター、ケアマネジャー、初期集中支援チームのいずれに連絡すればいいのかということが分からない。また、そのスクリーニングを求めることは困難。初期集中支援チームというワンストップ窓口へ連絡票を送っていただいたらこちらが振り分ける、その結果をかかりつけ医の先生にお返しをするという仕組みが一番使い勝手がよい。
- ・開業医の方に結びついていたら、そこで独自にいろいろ方策を練っておられるため、開業医が気づかない事例をどうしていくかということが問題になってくる。

(3) 介護者支援について

<意見>

- ・在宅に退院していただくことが難しい状態になっておられる方が多数を占めているので、なるべく施設退院ではなく在宅退院につなげるようには心がけている。家族に密に関わらないと入院が長期化し、1か月で返せないというケースが増える。
- ・これから家族支援をもう少しかたちにしていけないといけないと思っている。ピアサポートみたいなものがうまくつくれていないかもしれないという気がしている。
- ・認知症家族教室を行っており、昨年度からは家族同士の交流の場として認知症家族交流会も始めた。家族教室は月1回で、6か月コースで行なっており、医師、看護師、精神保健福祉士、作業療法士等が講師になって、認知症の理解を深めていく。教室を卒業した方は、家族交流会に移っていただく。毎回7～8名の方が参加している。

4 その他

改正道路交通法施行後の状況について

<意見>

- ・地域でどのように対応するか、6月に勉強会を行った。病院としてはマニュアルを作成した。

- ・ かかりつけ医からの紹介で3件程度。地区医師会で協議を行ったが、かかりつけ医で作成が困難であれば紹介いただくことになった。
- ・ 8～9件。MMSE、ADAS、CT、MRIを用い、なるべくその日のうちに作成するようになっている。判断が非常に悩ましいケースも多い。
- ・ 診断書の作成依頼は数件あり、中には自主返納された方もおられる。
- ・ 丹後地域での外来を担当していて、なんとか運転を継続したいと思い診断書作成を求めておられる方が多い。京都市内等は自主返納が多いのではと感じている。